

偶像禁止のイスラーム世界で、預言者や天使の絵があるのはなぜですか？

『コーラン』における「偶像」崇拝に対する 批判・忌避の推奨

アラビア半島の町メッカを拠点とする商人の家系に生まれたムハンマド(570頃～632)に、天使ガブリエルを通じて唯一神(アッラー)の啓示がはじめて伝えられたのは、610年のことである。預言者となったムハンマドはこの後、自身がメディナで亡くなるまでの22年間、あらゆるタイミングで、断片的に、唯一神の言葉を預かり、その言葉を民衆へと伝えた。預言者ムハンマドを介し、口伝えで人々の合間に広まった唯一神の言葉を、彼の死後、書物の形でまとめたとされているものが、啓典『コーラン』である。

『コーラン』では、「偶像」をどうすることが「禁止」されているのであろうか。『コーラン』には、人間が「偶像」を信仰の対象として崇拝することを批判し、そのことを忌避することを推奨する章句が存在する。たとえば、「預言者章」52～71節では、ムハンマド以前に唯一神の啓示を受けたとされる預言者たちのうちの1人であるアブラハムが、多神教の神々をかたどった「偶像」を崇拝する自身の父や一族を批判し、それらを破壊したことが言及されている。この章句を含む複数の『コーラン』の記述が、イスラーム教において「偶像」を信仰の対象として崇拝することを「禁止」する根拠となっている。

預言者ムハンマドと天使≠唯一神

では、なぜ、ムスリムが多数派を占める西アジア・北アフリカ・中央アジアおよび南アジア・東南アジアの一部地域において、預言者ムハンマドや天使を描いた絵画が存在しているのであろうか。

そもその前提として、預言者ムハンマドや天使

の絵は、『コーラン』で言及される「偶像」とは、異なる存在を描いていることを確認する必要がある。『コーラン』で言及される「偶像」とは、多神教の神々であれ唯一神であれ、信仰の対象である神の姿をかたどった像を指す。このような像が、ムスリムによって、あるいはムスリムのために、描かれることは決してない。

一方で、預言者ムハンマドや天使を描いた絵画は存在する。これは、預言者ムハンマドにしる天使にしる、イスラーム教においては、信仰の対象である唯一神と同格の存在とはみなされていないためである。その教義によれば、ムハンマドは、唯一神の啓示を受けた人類最後の預言者ではあるものの、あくまで1人の人間に過ぎない。この点は、イエス＝キリストを神の子とし、三位一体説を認めるキリスト教の多くの宗派と異なる。さらに、天使は、唯一神と人間の中間的な存在であるとされている。

とはいえ、ムスリムが多数派を占める地域において、預言者ムハンマドや天使を描いた絵画は、きわめて特殊な作例といえる。とくに、尊敬される聖なる人物である預言者ムハンマドの描写については、歴史を通じて、アラブ地域では忌避されてきた。また現代でも、ムスリムのあいだでその受け止め方は大きく異なる。

さらに、ムスリムの行動規範としてしばしば参照される預言者ムハンマドの言行録(『ハディース』)には、画家による創造行為を批判する逸話が含まれていることは特筆に値する。この逸話において、預言者ムハンマドは、画家が絵を描く行為を、唯一神による万物創造を模倣する行為であるとし、懲罰に値すると述べている。このような記述は、ムスリムが多数派を占める地域における、絵画や彫像に対する

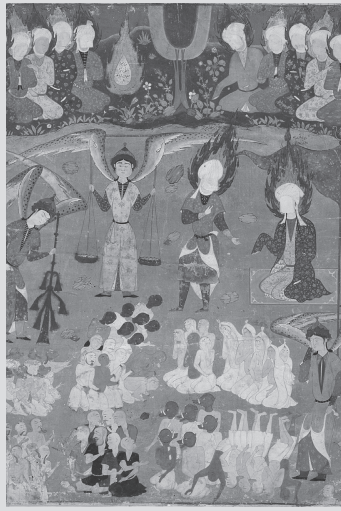


図1(左) ラシード=アッディーン「集史」写本(1314/15年、おそらくタブリーズ(西北イラン)、エジンバラ大学附属図書館蔵、inv. no. Or. MS. 20, fol. 45b.)

©University of Edinburgh Library Heritage Collections.

図2(右) 伝ジャアファル=アッサーディク『ファール=ナーメ』写本(1550年頃、おそらくタブリーズ(西北イラン)、ハーヴァード大学附属美術館蔵、inv. no. 1999.302)

©Harvard Art Museums/Arthur M. Sackler Museum, Gift of Stuart Cary Welch, Jr.

※図1・2のカラーは巻末図版参照。

受容のあり方の多様化に寄与していると考えられる。では、預言者ムハンマドや天使が描かれた絵画が許容されるのは、どのような場合であろうか。

写本挿絵として描かれた 預言者ムハンマドと天使

具体的な作例の検討に移ろう。イル=ハン国に仕えた宰相ラシード=アッディーン(1247頃~1318)が、普遍史書『集史』を第8代君主オルジェイトウ(在位1304~16)に捧げたのは1307年のことであった。図1は、ラシードの存命中の1314/15年に、おそらくイラン西北部の都市タブリーズで筆写された、アラビア語版『集史』第2巻「世界史」の一節に施された挿絵である。この挿絵は、ムハンマドに天使ガブリエルを介して唯一神の啓示がはじめて下ったという逸話を史実として示す本文の理解を助けるために挿入されている。重要なのは、預言者ムハンマドと天使が信仰の対象としてではなく、あくまで史書の登場人物として描かれているという点である。

史書以外のジャンルの書物においても、挿絵に預言者ムハンマドや天使が信仰の対象として描かれることはない。すべての事例を網羅的に紹介することは難しいが、預言者ムハンマドに関していえば、13世紀半ば以降に残る物証から、おもにペルシア語・チュルク諸語文化圏において、史書に加えて、ロマンス叙事詩、英雄叙事詩、預言者伝、教訓詩、書物占いの書、殉教譚、美德の書といったジャンルの写本に挿絵として描かれてきたことが知られている。

たとえば、図1のおよそ235年後、1550年頃に同

じくタブリーズで制作されたと考えられる、書物占いのための書物(『ファール=ナーメ』)の写本にも、預言者ムハンマドと天使が同時に描かれている(図2)。ここに描かれているのは最後の審判の場面であり、この挿絵のあるページを開いた読者の運勢を示す本文の内容を視覚化するために挿入されている。ここでは、3人の天使が描かれているほか、光背を有し、顔が白い布で隠された人物として、預言者ムハンマド(画面中央右端の座位の人物)が描かれている。このような預言者ムハンマドの容姿の描かれ方は、図1のそれとは大きく異なっている。ペルシア語・チュルク諸語文化圏においては、時代が進むにつれ、預言者ムハンマドの姿がほかの人物とは差別化されて描かれる傾向が強まる。これは、預言者ムハンマドが、ムスリムにとって尊敬と畏怖の対象であり、顔を描くことさえためられるほど高貴な存在とみなされるようになったためである。

このように、ムスリムが多数派を占める地域では、預言者ムハンマドや天使を描いた絵画は、信仰の対象となる唯一神の姿をかたどった像とは異なり、その目的や文脈によっては許容されることがある。ただし、それが普遍的な現象であるとは言えない。図像の解釈・分析に際しては、挿絵として挿入された書物のジャンルだけでなく、制作された時代や地域の社会的・文化的背景にも十分な注意を払う必要があるだろう。

(かんだ・ゆい／

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教)

教科書Q&A イスラームの教えと絵画 → p.16



ラシード=アッディーン『集史』写本(1314/15年、おそらくタブリーズ(西北イラン)、エジンバラ大学附属図書館蔵、inv. no. Or. MS. 20, fol. 45b.)©University of Edinburgh Library Heritage Collections. (p.17参照)



伝ジャアファル=アッサーディク『ファール=ナーメ』写本(1550年頃、おそらくタブリーズ(西北イラン)、ハーヴァード大学附属美術館蔵、inv. no. 1999.302)©Harvard Art Museums/Arthur M. Sackler Museum, Gift of Stuart Cary Welch, Jr. (p.17参照)

無政府主義はなぜ支持されたのですか？ サン・シモンやフーリエの主張は、当時どこまで一般民衆に支持されたのか、現在も影響力があるのか、教えてください。

無政府主義という語は、20世紀初めにanarchismという外来語からつくられた訳語ですが、今からみれば不正確な訳です。ただし、当時、世界各地のアナキストたちの多くが掲げていた理想は「国家なき社会」でした。ですから無政府主義という訳は、当時としては間違いではありませんでした。

しかし、現在まで100年以上のあいだに、アナキズムという語は、アナキストたちによって、より多様な意味で使われるようになりました。その原因の1つは、アナキズムという言葉を構成している語「アナキー(anarchy)」にあります。この語は「支配(archy)」と、「ない(an)」という語の合成語です。この語のなかで「ない」と否定される「支配(archy)」は、政府だけではなく、日々の人間関係のなかで、命令や指示などを押し付ける人々、それを受け入れざるをえない人々という関係があれば、そこには「支配」があります。

ただし、何を「支配」ととらえるかは人によって異なります。ある人は民衆に対する政府の支配だといい、ある人は女性に対する男性の支配だといい、またある人は、社会で標準化され押し付けられる「生き方」を「支配」だと感じるかもしれません。そうになると、「支配」の数だけアナキズムがある、ということになります。これら無数にあるアナキズムをここでは一括して、「支配のない状態を理想とする考え方や態度、その理想を追求するための行動」と定義しておきます。なお、「アナキズム」という表記もありますが、これだと「ない(an)」と否定される「支配(archy)」という語のなかに含まれる「アル(r)」の音が消えてしまうので、ここでは「アナキズム」

と伸ばして表記します。

ただし、アナキーという語は、一般には混乱や無秩序という意味で理解されてきました。その背後には、人々を支配・統制する機関がなくなれば、人はそれぞればらばらに勝手な行動をとり、社会は混乱におちいる、という懸念があり、また、人間に対する不信感があります。しかしアナキストたちは、仕事や日常生活の様々な場面で、命令や強制がなくとも、人々が自発的に協力することで社会に秩序が生まれる、そのような点に注目してきた人々です。そのため彼らは、各人が自由な状態にいるなかで、自分の能力を十分に発揮できれば、仲間と一緒に「自治」をおこない、水平方向に「連合」する、だから国家はなくても大丈夫だ、と主張してきました。「自治」とは、自分のことは自分(たち)でやる、ということ、「連合」とは自治をする個人や集団が水平方向につながっていくことです。

アナキズムはあまりにも人を信頼しすぎているのではないか、という批判もあります。たしかに、人を信頼せず、命令や強制や規則で縛って何かをさせたほうが、人は処罰を恐れて仕事を怠けず、犯罪にも関わらないかもしれません。しかし、信頼にもとづく対等な関係のなかで協力する方が、人は創造的な能力を発揮し、他者を気遣い、傷つけず、集団がまとまりと活力をもつようになる、と考えるのがアナキズムです。以上のことを前提にして、以下でご質問におこたえします。

アナキズムの150年

まず、ご質問のなかにあったサン・シモン(1760

～1825)とシャルル・フーリエ(1772～1837)についてです。彼らはロバート・オーウェン(1771～1858)とともに、産業革命によって拡大した貧富の格差を解消するために新しい社会モデルを提唱した初期の社会主義者です。彼らの思想のなかには、アナキズム的な要素もみられます。しかし、彼らにとって「支配」の問題はそれほど重要ではありませんでした。ですから、彼らをアナキズムと結びつけ、アナキストと呼ぶことは難しいと思います。

アナキストと呼ぶにふさわしい人物は、そのあとの時代に活躍したピエール＝ジョゼフ・ブルードン(1809～65)です。彼は、国家がない状態(アナキー)こそが自由で平等なのであり、実現すべき社会だと主張しました。しかも彼の影響で、国家がないという意味で「アナキー」という語が広く使われるようになりました。ただしブルードンは生涯にわたってアナキズムを議論し続けたわけではありません。その後、1870年代以降のアナキストたちは、ブルードンから多くを学んだとはいえ、彼よりもアナキズムそのものについて議論を重ねました。これにより、現在につながるアナキズムが形成されました。

1870年代から現在まで、アナキズムの支持者はおもに世界中の都市に住む下層・中間層、そして少数ですがミハイル・バクーニン(1814～76)、ピョートル・クロポトキン(1842～1921)のような貴族出身者や比較的裕福な階層の人々のあいだにみられました。つまり、自由な個人による「自治」が水平方向に結びついて作り出す「連合」の方が、上意下達の権力機構よりも、私たちがずっと豊かで幸福にする、と考える人々は、現在まで多様な階層から現れているのです。ただし、1人の人間の内面には、国家や権力は不要だ、という考え方と、権力は絶対に必要だ、という2つの考え方が同居して争っている、と指摘する人もいます。これが正しいとすれば、アナキズムを支持するということは、各人の「選択」の結果だということになります。もし自分にとっての「支配」を見出さず、見出してもそれをなくしたいと思わなければ、「選択」されないわけです。つまりアナキズムを支持するという「選択」は、各人の内面での決断にゆだねられています。以上が、アナキズムがなぜ支持されたのか／されるのか、と

いうご質問に対する答えになります。

そのようにしてアナキズムを選択した人が増える現象は、過去150年ほどのあいだで3回ありました。最初は、1870年代からロシア革命までの時期です。バクーニンは、革命による国家の破壊を通じて実現される国家なき社会主義を目標とする一方、国家権力を握って社会主義を実現するという構想に反対しました。体制をかえても、権力を握った人々による新たな支配をつくり出すだけだからです。またこの時期にクロポトキンの著作が日本語も含む各国語に翻訳され、世界各地の人々に広く読まれ影響を与えました。つぎに、1960年代から80年頃までの時期にアナキズムへの支持者が増えました。当時アナキズムは、フェミニズム、反戦平和運動、環境運動と結びつき、国家や企業だけでなく、女性を抑圧する家父長制も「支配」として批判し、それらの廃絶を訴えました。そして1990年代末から現在まで、アナキズムへの支持者が再び増加しています。アナキストたちは、グローバルな格差の拡大・環境破壊・人権侵害を引きおこしているとして国家、企業、そしてWTOなどの国際機関に抗議してきました。

アナキストたちは、そういった抗議行動が、水平的なつながりと直接民主主義に依拠していることをとても重視してきました。これは、政府や企業でおこなわれている上意下達とは真逆の方法によって、「今・ここで」自分たち自身によって「支配のない状態」を実現することを目的としています。この理想を「今・ここで」実現するという発想は、様々な社会運動だけでなく、その表現活動に取り組むアーティストにも影響を与えてきました。さらに近年では、台湾でIT担当大臣をつとめたオードリー・タン(1981～)がアナキストを自認し、政府や企業が脅迫や暴力で人々を強制的に従わせようとすればそれをやめさせることを望む、そのような権力に縛られない立場がアナキズムであると述べています。彼女の事例は、アナキズムが政府の閣僚から労働者に至る多様な人々に影響を与えていることを示唆しています。加えて、歴史上のアナキズムやアナキズム的な人間集団に関する文化人類学的に研究が進められています。以上が、現在も影響力があるかというご質問に対する答えです。

(たなか・ひかる／明治大学教員)